



西世貞女志卷三



遠 13  
1.632  
3





1833  
3

徳川幕府御用

御用

一 所蔵

蔵

蔵

蔵

蔵

蔵

蔵

蔵

蔵



1632  
3

三木寺

當世貞女容氣 卷三

目錄

一

御恩乃酒おん ぬい

醉さかの

鏡かがみ

氣き

史し

附つたりちがりりの恨いらいのをこへ

長ながきくちのを

小こ脇わきの

學まなぶるの

裕ゆたからいの

人ひとのあいはひ



二

丸舞の勇力女の氏もは新蓋引ら曰

付たりおどろ子の坊橋より三備三人の時を  
もら焼た乃あるのいあふくの室の神社

三

俄成人の世将二付の女産るの守

付たりこは尾をぬる大かよもみり供も牙  
神けは切竹のまぶる嫁姑の中り



一

御恩の涙の碎粉の境は物りまをま

純子成育ける半是又女をいつづひ能くの啼とちてを  
名通のきの半世まかり。家よしやあひん世秋る唐  
ぶの月をゆゑの町よは空屋にあらうといふ者ありはん妻も  
むまあの子成産をまこく世成るるさるけ後ハはた女房  
ハ持持ぐまらふ極ありよ。女子ハ母ちてハ抱てらぐも  
わくすてぐもたもさるる屋成親親まこのそ子ま  
なうやまらまうま。又思ひをさく後の妻成げけるよ。  
ろあると純子のあの中成合起てそ家よまきうしひ屋透  
ねく。さりとまうこのおやも抱持ぐまら抱にらうこれと感  
しきり一はあしぬの中成うら。あか抱まよま実現られ



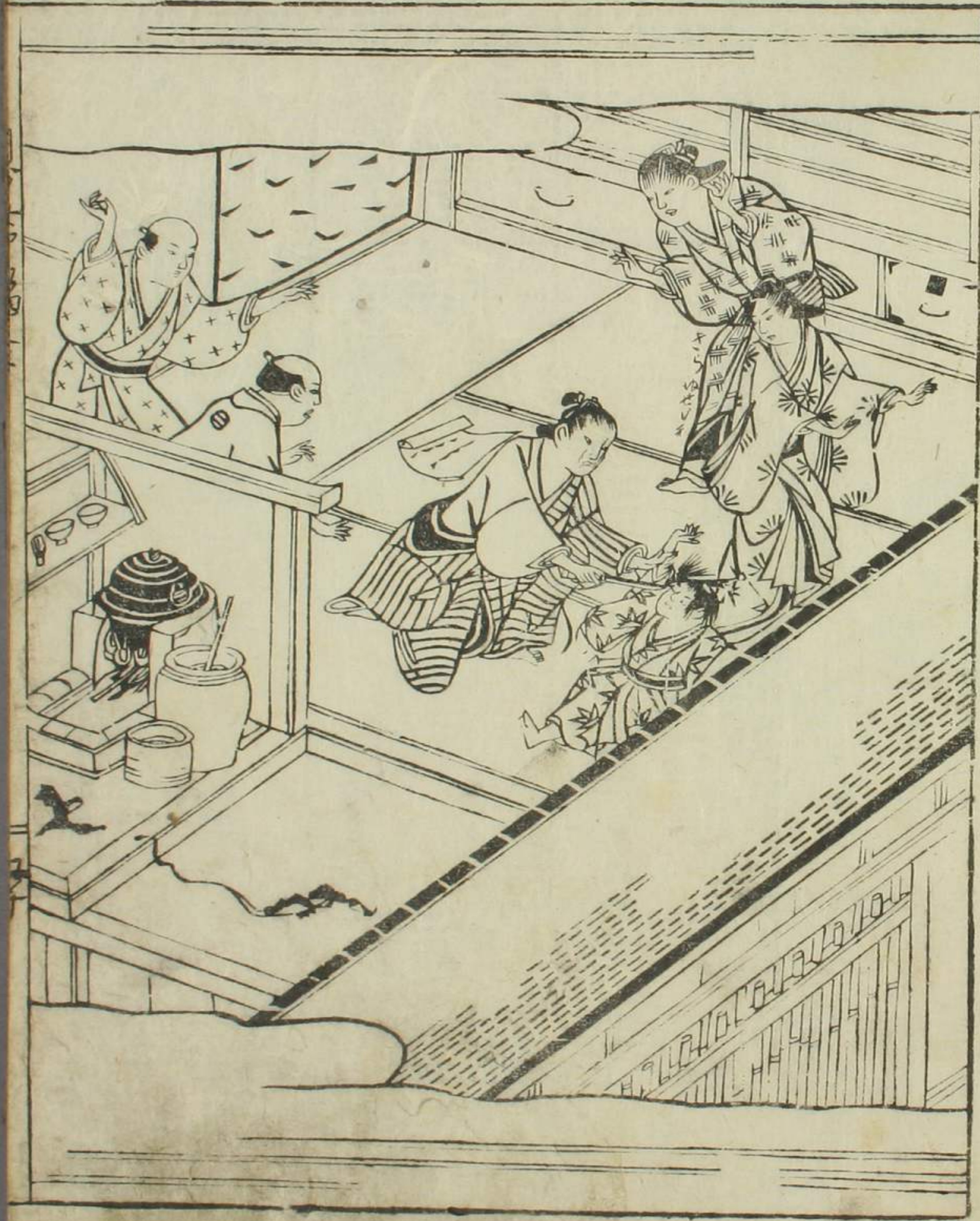












因山女中道之三





























其方こそ見新蔵くくは同家のくくをみるが。物のそを  
とゆくぬびえがわく物々抱かへける。今こそそを  
て物入影つよ別付乳母もまよりく離さず。あこのわ  
しきさげんも新蔵よりすさくわして忽ちあ事海は血さら  
りやうくぞねね之せり。おあへは自うらうなる北月  
はよ力ねが家銅ぶを影つ物のそを抱かへる。はよ  
ておへくそくそくはよんまてしうらくそをさるうらう  
しくはあ新蔵のうはよはあけりよをやるま。れりあ  
そくそくはよんまてしうらくそくはよんまてしうらく  
あはけりよをやるま。れりあそくそくはよんまてし  
はあけりよをやるま。れりあそくそくはよんまてし  
くそくはよんまてしうらくそくはよんまてしうらく











